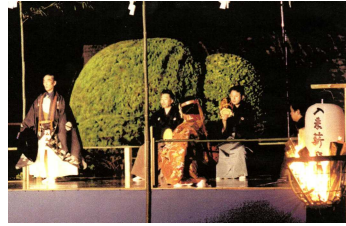


新能事始め



「鹿児島には能楽堂がない」との言葉を聞いたのは、一年前の鹿児島稲門会の席上、M県会議員からであった。それは渋谷氏下向七百五十年記念の「北薩歴史探訪の会」を成功させ後で、参加者からの来年も三木靖先生の講演をという要望にどう応えたらよいか考えていた時であった。私の脳裏に、「ふと「新能」という語が浮んだ。

「能」は学生時代、同級生に沢野春江さん（旧姓観世）がいて、天才といわれた長兄の故観世寿夫氏の舞台を見ていた。次兄の鍔之丞氏、三兄の栄夫氏

はいまや能楽界の重鎮である。夫の役職年後、何か共通の趣味を考えた私は、春江さんにお願ひして若松健史先生（重要無形文化財総合指定保持者）を紹介して頂き、入来に戻るまでの五年間を先生のお宅に伺って、謡曲の指導をして頂いていたのだった。私は若松先生が岡山の最上稲荷で毎年薪能を奉納されていることを知っていた。お伺いすると、昨年は長崎の諏訪神社でもなさるとのこと。ならば歴史の町である入来でも上演していただけないだろうかと考えた。

お忙しい先生の連続して二日空いているたった一回の機会を捉え、航空券を取ってお送りし、昨秋入来まで来て頂き、意中の場所、清色城址の下見をして頂いた。そして先生から其処は素晴らしい場所であるとの折り紙を付けて頂いた。開催日は土曜日がよいだろうと、来年の先生のご都合のよい土曜日を調べて頂き、八月二十八日と決めた。

入来で「能」の上演といつても、舞台などの装置をどうするか、先生方へのギャラなども高額なこ

とだろう。素手で行つには荷が重すぎるとも思わなかつた訳ではなかつた。十一月恒例の三田会と稲門会の懇親会があつた。五六年前まで三回ほど山形屋主催で薪能が行われたといふことは聞いていた。そこで山形屋の社長岩元さんに、

「『薪能』をやりたいのですが」

とお尋ねしたところ、直ぐさま秘書の女性に、当時の担当者の話が聞けるように手筈を指示して下さいた。

十一月上旬のある日、山形屋のレストランの奥の一室で、現在子会社の社長になられている野上氏、秘書室の前田氏とお会ひした。そして三回の全てのドキュメントのコピーを下さつて、懇切なアドバイスを受けたのだつた。それには各費用や人員の配置などごまごまと記されていた。私はアルバムまでお借りして、感激して帰つて来たのだつた。

資金援助については、入來の町長は「議会の承認が得られないから出来ない」とのことである。議員に聞けば「文化事業には誰も反対したことはない」

という水掛け論である。結局、実行時の支援しか望めないようであつた。そこで一応後援になつて頂いて、他に私の力の及ぶかぎりの団体に後援して頂くことにしたのだつた。

また県の文化事業に対する補助はないだろうかと、県庁の地方課や文化財保護課、観光課など回つて尋ねたが、いずれも実績のないものには援助出来ないとのことであつた。

それならば実績を作つて、今後は援助を受けられるように頑張らうと私は思つた。手作りで、きつちりやれば、七百五十万円あればなんとかなりそうである。五千円で千五百枚のチケットが完売すれば大丈夫だと計算した私は「能」の素晴らしさを確信しているのだちまち完売するだろうと単純に思つたのだが、これは大変な誤算で、「能」は鹿児島の人たちには殆ど馴染みのない世界なのであつた。

ポスターやチラシを作りあちこちに配布したり、マスコミに連絡したりと忙しくなつて来た。電話の問い合わせや振込用紙の送付にも追われる。しかし

手応えもり、楽しみにしているとの声を聞けば、思い切って実行しとつと決めて良かったとの満足感もある。

何よりも心強いのは、町の次代を担う若い実力者たちが支援会を作って、手足になってくれていることである。彼らはイベントの実行にも手慣れていて、何よりも問題な駐車場や会場の設営など、具体的な手順はすっかりお任せといった感じである。駐車場から会場までを百個もの提灯の明かりで案内してムードを出すなどというのも彼らの発想である。七月十七日、実際を見なくてはと、私と事務局は大土さん、照明・音響担当、会場設営担当などの四名と岡山の最上稲荷に見学に行った。費用節減のため、丁県議の奥さんのワゴン車をお借りし、交代で運転することにして、当日朝七時にわが家を出発。九時間かかって最上稲荷に着いた。大土さんはメジャーで舞台の高さを計ったり、音響係はマイクの所在を確かめたりと、とても参考になった。夜は主催の観光協議会会長宅の時代物の宿屋に泊まって、ア

ドバイスを受けることも出来た。

翌朝は八時出発。夜来の大雨の中を飛ばしてまた九時間で入来着。女性一人は揺れる最後部の席にいたため、後で腰の痛むこと。まともにワープロの前にも座れぬ一週間であった。しかし当地で見学した「国栖」という能も、あかあかと燃えるたいまつに映えて素晴らしかった。

チケットの売上げが一寸心配ではあるけれど、やはり意義あることをやっているという満足感は何ものにも変えがたい。先輩や後輩の陰ながらの支援もあり、各後援団体も出来るだけのサービスをして下さっている。きつとご覧になった方々も満足して下さいと、天に祈るこの頃である。先ずは行いを正

